



ニクラス・ルーマンの宗教社会学

畠中, 茉莉子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7958号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007958>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文（要約）

ニクラス・ルーマンの宗教社会学

2021 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

畠中茉莉子

目次

第1章 ルーマンと宗教社会学

第1節 ルーマン研究における宗教社会学の意味

第2節 先行研究

第3節 本研究の構成

第2章 社会と理念

第1節 システム論的な意味の概念をめぐって

第2節 「理念の進化」の着想へ

第3節 機能分化と意味領域をめぐる問い

第4節 「宗教の理念」をめぐる問いへ

第3章 宗教のゼマンティック

第1節 前近代におけるコスモロジー

第2節 近世における罪と道徳

第3節 近代における「超越の内在」の理念

第4節 「超越の内在」図式の限界

第4章 二つの「世俗化」論

第1節 キリスト教教会としての宗教システム

第2節 神学者と宗教社会学者の視点

第3節 現代の宗教的コミュニケーションへ

第5章 現代の宗教

第1節 マーケットを通じた演出と拡散

第2節 「信」が再喚起する疑念と理解

第3節 宗教システム論：機能とコード

結び：機能分化論の拡充か、それとも破綻か？

第1章 ルーマンと宗教社会学

ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann, 1927-1998) はドイツの社会学において、1960 年代の終わり頃から「社会の理論家 (Gesellschaftstheoretiker)」としてその名を知られるようになる (vgl. Schimank 1996: 135)。もちろんルーマンの理論が、1950 年代にパーソンズが持ったほどの覇権的な地位を得たというわけではない。それでも彼は、わずか数年のうちにドイツ社会学において名を馳せることになった。とりわけハーバーマスとの有名な論争を通して、彼の名前は広まっていく (Habermas/ Luhmann 1971)。やがて彼の社会学的なシステム論はドイツ国内に影響を及ぼすだけに留まらず、「より大きな国際的注目」 (vgl. Schimank 1996: 135) を集めるようになるのである。

日本においては少なくとも 1970 年代初頭には、佐藤勉によって、当時において機能主義的な社会論の再構成を試みる有力な論者の一人としてルーマンが紹介されている (佐藤 1971)。1977 年には村上淳一・六本佳平により『法社会学』の邦訳が公刊される (Luhmann 1960) が、この頃になると、当時の西ドイツ社会学においてルーマンの影響が徐々に増しつつあることも報告されるようになる (山本 1977)。1980 年代に入ると、山口節郎によるルーマンの社会論の紹介 (山口 1982)、土方昭と彼を中心としたグループによる邦訳書の刊行 (Luhmann 1970)、組織論の分野においては松本和良や長岡克行らの著作による論及 (松本 1981; 長岡 1984) などを経て、ルーマンの議論は次第に周知されるようになる。それに続く 1980 年代半ばから今日に至るまでは、日本では毎年のようにルーマンの著作の邦訳が公刊され続けている。とりわけその役割を中心的に担っているのが、馬場靖雄、土方透であり、加えて近年では徳安彰、赤堀三郎、高橋徹、小松丈晃らの名を挙げることもできるだろう。こうした多数の翻訳書、そしてルーマンをめぐる膨大な諸研究と諸議論の蓄積により、彼のシステム論的な社会理論の特徴と、彼独特の概念の用法は日本でも概ね知られるようになってきた¹。なぜ日本においてこれほどルーマンの議論が人気を博したのかは、それ自体が大きな問題ではある。ともあれ日本は世界的に見ても有数のルーマン研究大国なのである。

ところが近年のルーマン研究の傾向を見てみると、ドイツと日本の間には明確な相違があることがわかる。それは後年のルーマンが新たに重点を置くようになったとされるモメント、すなわちゼマンティック、社会の部分システム論、そして包摂と排除といった問題群へ

¹ 今日とりわけ多くの論者に参照されるものとして、馬場 (2001)、長岡 (2006) など。

の着目の度合いである。今日のドイツにおいては、彼の議論が 1970 年代の後半頃を境に「二つの明確に異なるフェーズ」(Schimank 1996: 135)に分かれるということを念頭に置き、こうしたモメントを重視する形で後期ルーマンを論じることが徐々に一般的になりつつある(vgl. Schimank 1996; Nassehi 1999; Schwinn 2001; Kieserling 2004)。彼らはルーマンの議論を完成したものとは見なさず、その理論構想は途中で終わっていると考えている。それゆえにルーマン理論の継承によるよりいっそうの深化を課題としているのである。彼らはルーマンの社会理論が本当に理論として有効か否か、あるいは現代の社会現象を説得的に描けるか否かの鍵となる観点を、こうした後期のモメントに即して議論しようとしている。例えばルーマンは後年、包摂と排除を論じることによって機能分化とはまた別の分化形式を論じようとする。さらにスポーツや扶助といったシステムについて新たに論じることによって、分出した個別の機能システムも時代に応じて変容していくことを示しつつあった。あるいはゼマンティック論においては、システム論と歴史の関係が新たに問題となった。このゼマンティック論の複数ある焦点の一つが宗教社会学である。日本においては、これらのルーマン後期のモメントの詳細とその意義に関する研究はまだ限定的である。関連する文献の邦訳が公刊されてからまだそれほどの年月が経っていないことも影響していると考えられる。そうした中でゼマンティックに関しては、先駆的なものとして何よりも高橋(2001)がある。個別の部分システム論については、法システムなどの一部の例外を除けばまとまった研究はまだ十分に進んでいるとは言えない²。近年では高橋・小松・春日(2013)などにより、機能分化した社会における個別的な部分システムを論じるための問題提起が行われている。包摂と排除の問題に関しては、ドイツにおける議論の展開を踏まえたものとして渡會(2006)などがある。いずれもこれからの本格的な展開が引き続き期待されるものである。

本研究はそうした後期のルーマンのモメントの一つであるゼマンティックに着目し、その中心的な切り口の一つである彼の宗教社会学を扱ったものである。日本においては彼の宗教社会学をめぐる包括的な研究はこれまでほとんど試みられてこなかった³。ルーマンの社会理論における宗教は基本的には社会の機能的な部分システムの一つであるとされる。それゆえ彼の宗教社会学は、往々にして彼の社会システム論の応用事例の一つとして処理さ

² 日本においては、ルーマンの法社会学の研究は盛んである。ただし、法社会学はルーマンの初期の頃から議論がなされていたものであり、その意味において他の部分システム論とは事情が異なる。

³ ルーマンの宗教社会学が日本において言及された貴重な例として、ここではさしあたり土方(2004)、小松(2013)を挙げておく。

れてきた。すなわち彼の宗教社会学は社会の機能分化を不動の前提とし、その中で社会にとっての何らかの機能を果たすシステムとして宗教を描くものとして理解されてきたのである。もちろんこの理解は決して誤りではない。しかしながらこの一言で片付けることができるほど、彼の宗教社会学は単純ではないようにも思われるのである。

予めルーマンが宗教を主題とした作品を列挙しておく、まず挙げられるのは二つの著作である。ただし彼の生前に公刊されたのは『宗教の機能』（邦題『宗教社会学』（Luhmann 1977）の一冊のみである。もう一冊の『社会の宗教』（Luhmann 2000）は、ルーマンの死後、編者 A・キーザーリンクがパソコンに残された草稿を書物として出版した遺作である。日本語でも読めるものとしては、さらに『社会学的啓蒙』第 4 巻に所収された宗教関連の諸論文（邦題『宗教論』）がある（Luhmann 1985c; 1987a）。『社会構造とゼマンティック』第 3 巻所収の「宗教の分出」（Luhmann 1989）は、100 頁近くに及ぶ大部の論考である。加えて『自己言及性について』所収の「社会・意味・宗教」もまた、宗教に関わるものである（Luhmann 1985）。なお英語で公刊された『宗教教義学と社会の進化』（Luhmann 1984a）は、1977 年の『宗教の機能』の一部の抄訳である。その他、十数本の諸論文、複数のインタビュー記事、さらには神学者たちとのシンポジウムや対談の記録が残されている⁴。これらの諸作品を総覧してみると、ルーマンの宗教論は意外なほど、彼の部分システム論の中では——法に次ぐほどの——大きな量的比重を占めていることがわかる。

本研究はこれらの諸作品の中で、とりわけ 1980 年代後半以降のものを重視している。その出発点となるのは、ルーマンがゼマンティック研究の一環として宗教を論じた「宗教の分出」論である。というのも、それ以降のルーマンの宗教論はそれまでの 1970 年代におけるものとは異なり、宗教をシステムとして描きながらも、そのシステムの存立の「不安定性」あるいは「未確定性」を前景に押し出すようになったと考えられるからである。それは社会における確固とした機能システムとして宗教を描いているという従来の彼の宗教社会学のイメージとは大きく異なっている。そこで描かれるのはアモルフで流動的、そして拡散的、あるいは瞬間的なものであり、継続性とは無縁な、宗教的なものの様態である。それにもかかわらず、ルーマンはこうした諸々の宗教的な現象をも宗教「システム」として描こうとした。その際には、機能分化論においてすでに用意されていた理論的な諸概念の規定の見直し、宗教の様態への見方の修正など、いくつもの理論的な調整と資料的な拡充が必要となる。本研

⁴ 細かな一覧は巻末の参考文献を参照。

究が彼の宗教社会学を単なる社会システム論の応用に尽きるものではないと考えるのは、そのためである。宗教をめぐるルーマンの議論は詳細に見れば見るほど、彼の従来の社会システム論の枠からはみ出す側面を持っている。というのもそこでは、ゼマンティックというのは、社会の機能分化に単純に適応するだけのものではないということが語られるからである。別限すれば、宗教なるものを通して社会システム論はその説明能力を問い直されるのである。ルーマンはその問い直しを自覚していた。そしてそれでもなお彼は、自身の理論枠組みにおいては扱いづらかったであろう事態を無視するのではなく、取り上げ、論じようとした。すなわち彼は自身のシステム論の枠組みをある部分は維持しつつ、そしてある部分は修正し、あるいは拡張を試みながら、宗教を描こうとしたのである。晩年の彼の宗教論には、近代社会とその宗教をめぐる彼の複雑で錯綜した思索の跡が残されている。本研究が提起しようとするルーマン像は、機能分化論の定まった理論を提起するルーマンではなく、そうした試行錯誤を試み続ける社会学者としてのルーマンである。それは決して近代社会の宗教についての簡明な見取り図ではないかもしれない。しかもその試みは彼自身の死によって未完に終わっている。しかしながら彼の宗教をめぐる思索は、確実に同時代の、そして後に続く論者たちに刺激を与えるものである。

ルーマンの宗教社会学は彼が宗教に関する論考を発表し始めた 1970 年代当時より、多くの神学者、社会学者たちの注目を集めてきた。論者たちはときには彼の複雑で錯綜した思考の進展に難色や困惑を示すことはあったものの、ルーマンの宗教論は着実にその内実を知られていき、またそれに関する研究も次第に増えていった。彼の没後 20 年を経た今日では、彼の議論に接続しようとする多くの論者たちは、それぞれの関心に沿った観点からルーマンにアプローチし、彼の宗教論を解釈しようとしている。その場合に重視すべきルーマンの議論は、ある論者たちにとっては初期の頃の教会組織論であり (vgl. Hermelink/Wegner 2008)、また別の論者たちにとっては宗教のゼマンティックである (vgl. Gärtner/Gabriel/Pollack 2014)。あるいは、歴史的・地域的含意を外し、現代における宗教的現象を論じうるものとして彼の議論を読もうとする論者もいる。例えば M・ペツケは、ラテンアメリカの宗教を、ルーマンの理論枠組みによって捉えるという試みを行っている (Petzke 2012)。今日のドイツの宗教社会学においては、ルーマンは重要な理論的枠組みを提起した論者の一人として位置付けられ、そして今もなお積極的に参照され続けているといえるだろう。しかしながら、ルーマンに依拠する形で、諸々の宗教的な事柄を論じようとする個別的研究は数多く見られる一方で、ルーマン自身の宗教社会学の全体的把握、とりわけその年代の変容にも止目してそれ

を捉えようとする仕事は、まだ存在しない。すなわち、クロノロジーも含めた彼の宗教論全体の把握、その論点の整理、そして彼の機能分化論との整合性を問う仕事である。本研究は、日本では初めてその課題を担おうとするものである。ドイツにおいても、この三つの視点を揃えた形での論及はまだ行われていない。

第2章 社会と理念

第2章においては、ルーマンの宗教社会学を考えるにあたって欠かすことのできない彼の「社会と理念 (Idee)」をめぐる思索についての考察を行う。それは1980年代以降に彼が発表した一連の『社会構造とゼマンティック』シリーズに収められている、理念概念を扱った諸論考に関わるものである。彼のいうゼマンティックとは、社会で培われてきた高度な意味の形式、とくにその歴史的な蓄積のことである。この高度な形式のうちで最も抽象度と包括性の高いものが、理念と称された。第2章では、ルーマンがこの理念なるものに着目するようになった経緯、そしてこの理念の概念のシステム理論への導入のプロセスを追っている。このプロセスは、1970年代以前にすでに展開され、有名になりつつあったルーマンの社会理論、特にその機能分化論の射程を歴史や思想史にまで拡大し、さらなる精緻化を求める試行錯誤でもあった。この一連の思索の成果が目に見える形で示されたのが、社会の部分システムを扱った晩年の諸著作だったのである。彼の後年の宗教論は、そうした経緯を前提として著される社会の部分システム論の一つであった。それも、理念の概念がとりわけ大きな比重を持つ部分システム論であったのである。

第3章 宗教のゼマンティック

第3章では、この理念の概念を念頭に置いたルーマンの宗教ゼマンティック論、その長編の主要な論文である「宗教の分出」を扱っている。ルーマンは、宗教をめぐるゼマンティックを古代社会から近代社会の成立期にかけて、歴史的に順を追う形で描写しようとする。その論述は多数の歴史学的・思想史的研究を参照しつつ行われ、しかもルーマン自身のシステム論的な観察の用語がそこに重ねられているので極めて難解なものとなっている。彼の議論には繰り返しや重複も多い。しかしながらその反面、この宗教ゼマンティック論は、ルーマンが宗教ということではいかなるものを想定していたのかを窺い知るための恰好の手がかりと

なっている。本研究はこの論考を彼の宗教社会学を考える上では決定的な重要性を持つものであると考えている。そのためにこの論考については、第3章の全体を費やし、可能な限り詳細な解説を行っている。

第4章 世俗化

第4章では、第3章で扱った宗教ゼマンティックのその後の展開に関わる問題を扱っている。すなわち社会が「世俗化」したとされる近代と現代の社会における宗教のあり方をめぐるルーマンの議論が主題となる。ここで扱われる彼の世俗化論には、複数のバージョンがある。この章では、それらのうち特に1977年に発表されたものと、2000年に公開されたものを取り上げ、両者の時期の間でルーマンの宗教の見方が変化していたことを明らかにしている。それは彼の宗教社会学の時系列的な展開に関わるものである。というのも彼は同時代の神学者や宗教社会学者の動向を踏まえ、それを自身の議論に反映させていたと考えられるからである。この一連の展開の中に、第3章で扱った「分出」論も位置づけられる。それにより、ルーマンが近現代社会における宗教のシステムとしての存立にいかなる観点からアプローチしようとしていたのかということが示される。

第5章 現代の宗教

第5章ではそれまでの議論を踏まえ、ルーマンが現代と将来の社会における宗教の様態をいかなる形で考えようとしていたのかを検討する。その際の分析の主軸となるのは、彼の遺作の一つ『社会の宗教』(Luhmann 2000)である。この本は彼の死後に残された草稿を編者A・キーザーリンクが著作の形でまとめたものであり、編者自身が未完であると語っている。そのため彼が最後に示そうとした宗教システムの像は断片的な形でしか得られない。ここではこの断片的な像にある程度方向性を見出すために、ルーマンの影響を強く受けながらも独自の宗教論をそれぞれ展開した二人の論者、すなわちN・ボルツとH・ティレルの議論を参照している。彼らの示した宗教の様態論と比較することによって、ルーマンが提起しようとした現代社会においてもシステムとして存続する宗教なるものに一定の見通しが得られることになるだろう。

結びでは、このような宗教社会学を組み込んだルーマンの思索が彼の社会学の基本的前提である機能分化論と整合的か否かを考察する。これは後期のルーマンにおける論点の拡大が、彼の機能分化論のよりいっそうの充実につながるのか、それとも破綻に帰着するのかという、ルーマン思想の根幹に関わる問題である。例えば、包摂と排除の概念の接種をめぐっては、ルーマン派の論者の一部は、それは結果としてルーマンの社会理論に「欠損 (Defizit)」(Göbel/Schmidt 1998: 5) をもたらすことになったのではないのかという議論を提起している。そこで示されるのは、結局はルーマン元来の社会の機能分化論と、後に導入されるゼマンティック的な議論は、理論的に接合しうるのかどうかという問いである⁵。同様の問いは、宗教社会学と「理念の進化」論についても必然的に生じるように思われる。少なくとも宗教が個別システムとして他の政治や経済、法、教育などと並んで成り立つのかどうか、ルーマンの議論にある揺らぎが生じつつあったのは事実だと考えられる。彼の宗教社会学が持つ社会理論の拡充の可能性と破綻の危険性、この二義性を我々は認めつつも、ルーマン研究を志すものとして前者の方向を探ってみたい旨を最後に語る。

⁵ M・ゲーベルと J・F・K・シュミットは、ルーマンが早い段階から用いていた機能分化論に基づく初期の「包摂 (Inklusion)」の概念と、ゼマンティック論を踏まえる形で導入された後期の「包摂／排除 (Exklusion)」の区別は、社会理論的には必ずしも整合的でないと考えた。彼らは、後者の導入はルーマン理論の拡充に繋がるものではなく、むしろ大きな難点をもたらしたと評価する (Göbel/Schmidt 1998)。というのも、彼らの見るところ、後者の視点では結果として、機能システムにおける包摂と排除の規定が多義的となってしまう、「いかにして機能システムへのシステムの接近が作動的に可能となるのか (あるいは不可能となるのか)」(ebd. 5) という、機能分化論的な包摂の概念にとって決定的に重要な問いを十分に展開することができなくなるからである。